

# アメリカのシルバークエア視察記

その取組みと考え方 吉宮仁美

## 1 はじめに

わが国では世界でも類を見ないほどのスピードで高齢化が進んでいる。新聞の「専業主婦が在宅で介護する可能性は四十歳代では一九九〇年の十五人に一人から二〇二五年にはほぼ二人に一人となる」の記事を見て、私は大変ショックを受けた。

保健婦としての私は、日常の訪問活動の現状から、介護上の深刻な問題を実際に肌で感じていた。この深刻化する介護問題に行政を担う者としてどのように取り組んでいったら良いのか？ 若い世代にまで苦勞をかけなければならぬのか？ 将来高齢者となる私達自身はどう生きていったら良いのか？ 様々な思いが駆け巡った。

日本の社会状況も女性の就業率の上昇、子供との同居率の低下などアメリカに似た傾向にある。そこで私は、アメリカの高齢者施策、を見ることにより学ぶ点があると思い、沢山の人のアドバイスや援助のもとに視察旅行を行った。視察先は、障害者の自立を支援する生活自立センター、高齢者の社会貢献を支援するボランティア協会、横浜市の二〇一〇年

に相当する一七・五%の高齢化率を示すメリランド州の保健衛生局などである(表1)。

## 2 生活自立センター(CIL)



サンフランシスコ市内より地下鉄バートに乗って三十分で着く学園都市カリフォルニア大学バークレイ校の近くに同センターがある。

### ① 歴史

一九六二年、エドワード・ロバート氏(ボリオで四肢麻痺となり車椅子生活となった。後にカリフォルニア州リハビリテーション局長となり、国際障害者年に来日したことがある。)がカリフォルニア大学バークレイ校に入学したことがきっかけとなり、彼を中心に大学の建物を障害者向きに改造する事を要求し、成功させた。「卒業後は施設に戻りたくない。障害者でも生活を自立し地域の中で暮らしたい」「障害者たちのことは、障害者たちでなくては分らない」という強い希望のもとで、一九七二年、障害者自身の手によって運営される全米初の生活自立センターがこ

こに設立された。

このようなセンターが市民権法制定の背景もあり全米に広がり一九七八年、当時のカータ大統領により認められ、国から援助が得られるようになった。重度の障害者が地域で自立した生活を営む為に必要なサービスを提供する非営利の民間機関である同センターは、現在では約四百カ所ある。

### ② 概要

センターの方針は、障害者が地域の中で自立して生活出来るように支援することであり、このトレードマークは「ドアを開けて世界へ、世間へ出ていきましょう！自由を求めて！」という意味である。スタッフは六十三人、そのうち障害者が五十七人となっている。利用者の費用はカウンセリングを除いて全て無料ということだ。

サービスマニッシュは介護人の手配、視力、聴力障害者の為のサービス、就職や住宅の斡旋、住宅改造(大工の派遣)、カウンセリング、ピアサポート(仲間支援)、法律相談、高齢者自立プログラムなどがある。

高齢者自立プログラムのための事務所はオー

- 1 はじめに
- 2 生活自立センター(CIL)
- 3 カリフォルニア大学バークレイ校中央図書館
- 4 メリランド州保健衛生局
- 5 ケズウィック・アダルトデイケアセンター
- 6 マナーケア老人ホーム
- 7 全米退職者ボランティア協会(RSVP)
- 8 まとめ

サンフランシスコ

- 1. 生活自立センター(CIL)
- 2. カリフォルニア大学バークレイ校中央図書館

ニューヨーク

ワシントンDC

- 8. 全米退職者ボランティア協会(RSVP)

メリーランド州ボルチモア

- 3. 州保健衛生局
- 4. デートン病院&メディカルセンター
- 5. ケズウィック アダルト デイケアセンター
- 6. 退職者コミュニティ ホーム
- 7. マナーケア 老人ホーム



アメリカ合衆国

クランドにある。市が土地を借り上げる形でバックアップし、建物の一階は保育園、二階はその事務所となっている。事務所のスタッフは責任者他四人で、リユーマチの七十三歳の女性、八十歳の人もスタッフの一員であったことには大変驚いた。

### ③ 一人暮らしの高齢者女性

八十八歳の女性で高齢者用市営住宅に一人暮らし。最近彼女には、主治医や五十歳の娘の死、さらには持病の高血圧症、腰痛の上に加えて帯状疱疹になるという不幸が続き、すっかり気持ちが落ち込んでいると言う。リユーマチの彼女は「同病相憐れむ」気持ちを良く理解出来、ピア（仲間）として精神的支援をしている。住居は八階建てで一階に美容院や集会所があり、その日は週一回の無料の野菜配達日にあたり大勢の高齢者が集まっていた。

### ④ 視力の低下した一人暮らし女性

六十二歳の黒人女性で一般の家に一人暮らし。緑内障により視力低下となった。娘と息子が近くの町に住むがあまり家には来ていないようである。室内は綺麗に整頓され、ワンピースを着て居間のソファーに座り待っている。一日の生活の流れは図一のとおりである。手芸（手作りクッションがソファーにあり）をしたり、ラジオを聞いたり、掃除は出来ないが整頓をするなどして過ごしている。一番の楽しみは教会へ行くことで、友達と連れていってくれる。「一人で暮らしている淋しくないのか」と聞くと、「友達が来るから淋しくはない」ということだった。「何

故子供たちと暮らさないのか」には「子供達は私の生活が不自由だろうと、同居し世話をしたいと望んでいるが私は希望しない。なぜなら親も子も自由、個人主義、自立が大切と考えているから」と語っていた。

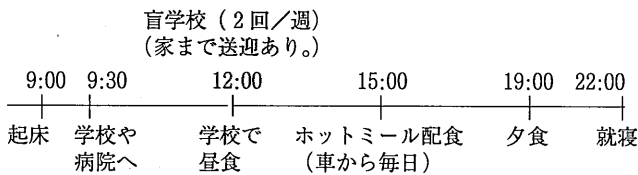
彼女のような在宅高齢者への行政支援は配食サービスのみであり、個人でヘルパーを雇ったり、子供など身内以外の友人の助けを借りなければならず、十分な公的ケアを受けているとは言い難い。

### ④ 感想

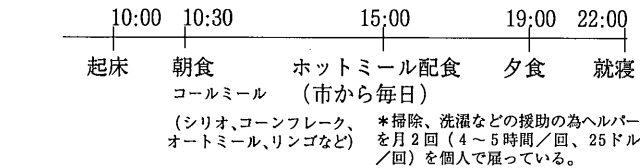
センターの九割のスタッフが障害者で、まさに自分達で考え、行動し、他の障害者のサポートをしていることに驚いた。センターの趣旨は「障害者によってコントロールされていること（理事がスタッフの半数以上が障害者であること）、地域に基盤をおき、非営利団体であること……目的は自立生活技術を短期訓練することではなく、障害者が住んでいる所での継続的なサポートシステムを提供することにおかれている」となっている。このセンターはまさに障害者の障害者のための障害者主導による生活自立プログラムを地域で展開している。就職斡旋についてもその人の障害の有無や程度ではなく、その人がどんな教育を受けたのかが大切であると説明があった。今さらながら教育の大切さを認識したと同時に障害の有無で差別されないアメリカの社会を見た気がした。高齢者自立プログラムのピアサポートとして、有病の高齢者も高齢者の為に活躍していること、その活躍の場を提供していることは大変興味深かった。

図一 視力障害のある一人暮らしの女性の1日の過ごし方

#### ① 盲学校や病院へ行く日



#### ② 普段の日



写真一 視力障害のある一人暮らし女性（右端）とCILのピアサポートとして働くリユーマチの女性



表一 視察先の概要

都 市	訪 問 先	内 容
1 サンフランシスコ 1993年9月24日	生活自立センター（CIL, Center For Independent Living） 家庭訪問	非営利団体の全米民間組織。障害者の自立の生活の支援のし方を知る。要援護の在宅高齢者の暮らし方を知る。
2 サンフランシスコ 9月24日	カリフォルニア大学パークレイ校中央図書館（UC, Berkeley）	アメリカ障害者法について知る。
3 メリーランド州 9月29日	州保健衛生局（Department Of Health & Mental Hygiene）	在宅高齢者を支える州の施策を知る。
4 ボルチモア市 9月30日	アトントン病院 & メディカルセンター（Deaton Hospital & Medical Center）	教会が設置。重症ケア病棟、慢性病棟、ホスピス病棟などがある。
5 ボルチモア市 9月30日	ケズウィック アダルト アイケアセンター（Keswick Nursing Center）	非営利団体での在宅高齢者を支えるアイケアサービスの具体例を知る。
6 ボルチモア市 9月30日	退職者コミュニティ ホーム（Poland Park Place, Retirement Community）	非営利団体で福祉の企業化の様子を知る。
7 ボルチモア市 9月30日	マナーケア 老人ホーム（Manor Care-Ruxton Nursing & Rehabilitation Ctr）	営利団体の痴呆病棟における痴呆高齢者の具体的なケアを知る。
8 ワシントンDC 10月1日	全米退職者ボランティア協会（RSVP, Retired Senior Volunteer Program）	国の組織。高齢者のボランティア活動を知る。

また一例ではあるがアメリカの親子関係や扶養意識も知ることが出来、大変有意義であった。

### 3 カリフォルニア大学バークレイ校中央図書館

ノーベル賞受賞者を数人輩出している優秀な大学で現在の学生数は約三万人である。訪問した当日、門の前で六、七人の女学生のクリスタルのようなさわやかコーラスパフォーマンスが練り広げられており、キャンパスには電動車椅子に乗った学生が数多くいた。キャンパスのほぼ中央にある博物館のようなどっしりした建物が中央図書館である。このような図書館が他に七カ所もあり、蔵書は全部で約七百万冊ということである。

#### ① 概要

三万人の学生のうち視力、聴力障害者の学生は八百〜九百人いる。車椅子使用の学生数は障害学生プログラム (Disabled Students Program) へ問い合わせたが、ちょうど担当者離席のため調べられなかった。しかしキャンパスの様子からもかなりの学生がいると思われる。一九八一年作成の「バークレイ校内各施設へアプローチするためのガイド本」を見せて頂くが、全ての施設が車椅子で利用出来るようになっており、他大学と比較して最も優れた環境である。

また、一九九〇年「アメリカ障害者法 (The American's With Disabilities Act)」が制定されたことにより、会社、学校、レスト

ラン等の全ての施設を車椅子でも利用出来るようになった。それは障害者達がレーガン政権時代に運動を起し、幾度も幾度も要求をし正式に認められたのだという。そうした動きを受けて「障害者 (Disabled People)」から「異なった能力をもつ人 (Differently Able People)」へとプラスの表現に変わった。これら障害者政策に関する全ての資料がこの大学の図書館に収められている。

#### ② 感想

その日、「日本の歴史について」という文献を探してきた女性がいたが、彼女は一般市民であり、大学図書館を一般の市民にも開放していることは素晴らしいと思った。また、校内に障害学生プログラムがあることは大変興味深かった。「異なった能力をもつ人」の大きな力がこの国の社会を変えていく姿を知ることが出来た。

なるほど街中を見ると、全ての男女トイレに障害者用のトイレが一緒に設置されていたり、全てのレストラン等の入口には障害者マークと入り方経路案内板が表示されていた。旅行中は坂の多いサンフランシスコの街中やショッピングモール、観光地、学校等においても多数の車椅子使用者が見られ、障害者が日常生活の風景の中にとけ込んでいた。印象的だったのは、真赤なスーツを着た女性が車椅子で買い物を楽しんでいた姿、キャンパスで車椅子に水筒をぶら下げ他の学生達に混ざり歓談していた学生の姿である。

先般のニュースでは東大へ開校以来三人目の全盲者が合格したと報道されたが、日本の

学校ではどれ程の障害者を受け入れているのだろうか、街中にはどれ程の車椅子の姿が見られるのだろうか、と考えてしまった。

### 4 メリーランド州保健衛生局

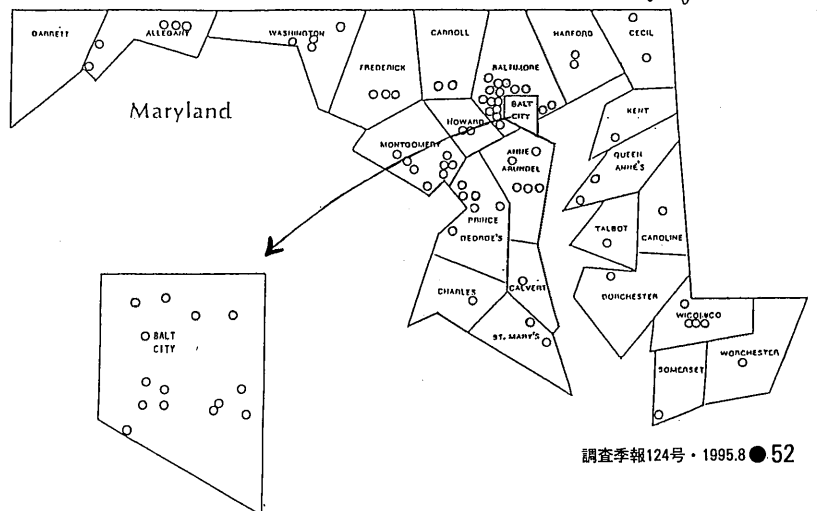
保健衛生局は、ニューヨークからワシントンDCに向かうアムトラック(鉄道)で二時間三十分程で着くメリーランド州ボルチモア市にある。建物は大きな看板もなくシンプルでいかにも役所といった感じである。

#### ① 概要

メリーランド州の人口は約四百八十四万人で六十五歳以上の高齢者比率は横浜市の二〇一〇年に相当する一七・五%である(表一②)。ちなみに保健婦は七百十六人(住民七千人に対して保健婦一人の担当)が活躍している。保健衛生局は国の法にそって、そ

表一② メリーランド州と横浜市のアダルトデイケアの比較

	メリーランド州 1992年	横浜市 1992年
人口	4,841,000人	3,272,180人
65歳以上 要介護	845,932人 (17.5%) 83,651人 (9.9%)	297,744(9.1) 25,000(8.4)
対象者	閉じこもり、機能低下	虚弱老人
回数	2~6回/週 (月~金曜日)	1回/週 (月~金曜日)
時間	AM9~PM4(AM7~PM6)	AM10~PM3
会場	86カ所、あらゆる所 (老人ホーム、病院、学校、教会、高齢者住宅、多目的地区センター、シニアセンター)	27カ所、特別養護老人ホーム、在宅介護サービス施設
内容	看護サービス、食事、治療上レクリエーション活動、運動、パーソナルケア、カウンセリング、送迎、治療食、言語、身体、職業療法、ソーシャルワーク	入浴、昼食送迎、健康チェック、生活指導、養護、日常動作訓練、看護教室



の下におかれている二十四郡の地方保健局を対象に予算の配布・指導・管理を行っている。

歳をとると病気を持ちながら長期間暮らさなければならぬが、十分なお金がないので十分なケアが受けられない。

⑦在宅高齢者の援助  
六十五歳以上の高齢者のうち一割が要介護高齢者である。そのうち在宅療養が殆どであり、七十五歳以上でも施設療養は一割にしかすぎない。家族が近くにいた場合、介護するのは女性であるという。援助として①家事援助(三〜五回/週、夜はなし)②パーソナルケア(無資格者による入浴、食事、着替え介助等の直接的ケア)③訪問看護(血圧チェック、インシュリン注射、床ずれ処置、呼吸装置管理、パーソナルケアのチェック)④アダルトデイケア(二〜六回/週)⑤配食サービス(二〜七回/週、少人数利用)⑥歯科往診(個人で頼む)⑦ボランティア等がある。

②公共交通機関が不十分で、ある地域では交通手段がない。高齢者が外に出て必要なサービスが受けられない。

③ほとんどの人は子供と同居しない為老夫婦あるいは単身となる。子供は離れて暮らし、近くに居る場合でも働いている。健康を損ねた高齢者は家で閉じ込められ、社会的孤立となる。

④高齢になると住宅のメンテナンスが困難となる。しかしスペシアルハウジング(身の回りのことができる自立可能の人が入所するホーム)も十分ではない。

⑤「アメリカは十年前日本と同じであったのが徐々に病院や老人ホーム経営もビジネスであるという考えに変わった」と言う。「今のアメリカのやり方で成功していますか」と聞く

と、返事に困っている様子で「賛否両論の意見があり、私はどちらとも言えない。良くないと言っている中には死にそうになってもお金や保険がないと病院や老人ホームに行けない現実がある」と答えてくれた。

また、ソーシャルワーカーは「デイケアや老人ホームの新設には国が必要度を厳しくチェックし数をコントロールしており、定期的監視もあり頭が痛い。大統領が今取り組んでいる医療保険改革の国民皆保険制は良いがこのセンターのような非営利団体においては、

## ② 感想

高齢者を取り巻く社会状況はどの国でも同じなのだなと思った。「交通の便が不十分」

なため高齢者が外に出て必要なサービスが受けられないことや「個人、自由、自立」を尊ぶこの国は子供が大きくなると家を離れ、近くに居ても皆働いており親の側に居ない現状では「孤立、孤独」になっていくのだろう。

CIL(生活自立センター)の家庭訪問で一人暮らし高齢者が「一人暮らしでも淋しくない。友達がいるから」と言っていたのはただの強がりだったのかどうか測りしれない。日本の社会状況もそうなりつつあるのではないかと思った。

アダルトデイケアは、あらゆる場所で受けられるようになっており、内容も治療上のレクリエーションや運動、リハビリテーション、

言語療法等単に閉じ込めり予防だけでなく積極的にその人の能力を引き出すような治療プログラムを提供している。新設時は州の認可が必要であり、定期的にプログラム内容を州が監視し、質の向上と均一化を図っている点は大変参考になると思われる。実際のデイケアを視察したので次に述べることにする。

## 5 ケズウィック・アダルト デイケアセンター



ボルチモア市街地より車で十五分程の所に、老人ホーム、デイケアセンター、スペシアルハウジング等の施設が集まっており、一帯は緑の多い静かな所である。センター長は「日本企業のマネージメントは世界の中でも優秀なのに、何故病院や老人ホームにも同じ方法を用いないのか」と幾度となく質問する。

「アメリカは十年前日本と同じであったのが徐々に病院や老人ホーム経営もビジネスであるという考えに変わった」と言う。「今のアメリカのやり方で成功していますか」と聞く

と、返事に困っている様子で「賛否両論の意見があり、私はどちらとも言えない。良くないと言っている中には死にそうになってもお金や保険がないと病院や老人ホームに行けない現実がある」と答えてくれた。

また、ソーシャルワーカーは「デイケアや老人ホームの新設には国が必要度を厳しくチェックし数をコントロールしており、定期的監視もあり頭が痛い。大統領が今取り組んでいる医療保険改革の国民皆保険制は良いがこのセンターのような非営利団体においては、

## ⑨ 高齢者の社会的問題

担当者達が語ってくれた州の高齢者の社会的問題は次の通りである。

①医療ケアのコストが高い(特に老人ホーム)。

全てのサービスの程度を下げない限り維持出来ない」と語っていた。

## ①概要

一人で家に居られないが、病院や老人ホームに入るまでもない母親をかかえた女性が同センターの必要を感じ、設立を図った。来所者は患者と言わずパティシパントと呼ぶ。この日は月に一度の行事の日(ウエスタンデイ)にあたり、沢山のパティシパントやスタッフ、ボランティアが昔の開拓時代の服装で楽しい音楽の流れる中でダンスをしていた。どの人がパティシパントかボランティアか分からない程高齢のボランティアも混じり援助していた(写真1・2)。内容は表1・3の通りである。

## ②感想

印象的だったのはパティシパントの名札の色で、緑色の名札の人は「救急に瀕した時応急処置を施して下さい」。一方、赤色の名札の人は「何も処置を施さないで下さい」の意味である。これは「コード・ステイタス」と呼ばれている。本人あるいは家族、友人により老後の死の決定を明らかに出来る「医療上の意志決定権の代理人制度」によるものである。

ケア内容については特に園芸療法(ホーテカルチュアルセラピー)が印象に残った。ソーシャルワーカーの説明によると「土に触れると、昔の記憶を指が覚えており正確に取り組むことが出来る。パティシパント自身が楽しんで止めるように言っても止めない位夢中になる」と効果を認めていた。アメリカで四十

年前から試されヨーロッパにも広がった療法で、今後日本でも「植物の名前や種の書き方を覚え収穫までの世話をし、目的と評価を繰り返すことで意欲的な生活が期待出来る」ため、高齢者、精神・障害児などあらゆる分野への活用を考えても良いと思った。また、デイケアが在宅高齢者を支えている大切な制度であることを認識した。

## 6 マナーケア老人ホーム

ボルチモア市街地から車で三十分程の郊外にある営利団体の老人ホームへ伺う。管理者であるケイさんが二十年、他のスタッフも七十歳と長く勤務され、安定した経営と働きやすい良いホームと思われた。一階は自由契約の豪華な感じのホームで、二階は国から援助のある病院風の棟と痴呆棟から成り立っている。その中で痴呆棟では表1・4に示すきめ細かな配慮がなされていた。

## 7 全米退職者ボランティア協会

(RSVP)



ワシントンDCにあり、国の組織なので入口にはクリントン大統領とゴア副大統領の写真と共に国旗が掲げられており、警備員にチェックされ許可パッチを付け入室した。ここRSVPは会社で言えば本社のようなもので五十州の各支店の方針や経済的な面で援助、指導をしている機関である。国が借りているこの全体の建物は「アクション(連邦政府ボラン

表-3 ケズウィック・アダルトデイケアの内容

参加の方法	医師より紹介、ロコミ、家族から電話、ソーシャルワーカーがセンターに来れる様に考える。
回数	最低2~6回/週(月~金)
時間	9:30~15:30(延長7:30~17:30)
パティシパント	70%~痴呆老人 30%~脳卒中老人
スタッフ	18人(登録看護婦、職業療法士ソーシャルワーカー、活動コーディネーター、サービスコーディネーター)
ボランティア	2~3人(学生や老人)シニアセンターより派遣、*特別行事の時7~10人
1回料金(1ドル110円換算)	貧困層~国より援助あり無料、メディカルアシスタント 中間層~収入により24%の割引 金持ち層~49ドル(5390円)
送迎	バス4台あり、あるいは家族送迎料金+往復9ドル(990円)、センターから7マイル(約11km)の範囲を送迎
食事サービス	2スナック(10:00,14:30)1ランチ(12:00)屋外バーベキュー等夕食がスープだけでも良いよう1日の総カロリーを摂取
ケア内容	高血圧、糖尿病老人等の健康管理、入浴、作業療法(セラミック、ガラス細工、ケーキ焼き、果物や肉を串にさすバーベキュー料理、手筋肉を使う)園芸療法(同敷地内に車椅子でも作業出来る花壇あり。ハーブや料理に使う植物を育てている)

写真-2 ケズウィック アダルトデイケアセンターのウエスタンデイ



表-4 痴呆高齢者に対するケアのポイント

スケジュール	廊下の壁に週間、時間毎の細かい表が貼ってある。(それを基に動ける様に)	調度品	全ての物に名前を貼る。鏡なし。テーブルランプは固定。(落ちて割れない様に)
絵	廊下や部屋にあるのはシンプルで家車木等はひと目で分かる絵である。	室内	壁は反射しない様な工夫。音は小さい。明かりはやや暗い
ミーティングルーム	ガスコンロや台所用品は鍵がかかっている。他棟との入口も特殊になっている。	部屋の入口	自分の部屋と分かるように本人の顔写真と名前が入口に貼ってある。 また入ってはいけない部屋の入口には赤いテープを渡してある。

「ティア機関」と呼ばれる組織が運営し、RSVPはその中の一つの協会である。



①概要  
⑦アクション  
六つの協会から成り立ち、表15が各協会の内容である。

④RSVP

ボランティアの平均年齢は七十二歳であり、最高年齢は百五歳である（その人は電話番号のボランティア活動をしているとのこと）。活動内容は表16の通りである。表のゴシックの部分はアメリカの社会状況を反映したボランティア活動である。ボランティア活動をする高齢者の意識や目的は①個人や社会を助きたい②社会と関わりたい③退職しても忙しくしたい④その他として健康維持、自分の能力や経験を役立てたいということだと説明があった。

②感想

旅行中、CILEのピアサポート、ボルチモア駅での案内役やデイケアセンターでのボランティア活動等を目的に社会全体に「ボランティアリズム」が浸透していることが分かった。ボランティアリズムは、言わば、他の人の為に自発的に時間を与える、しかも報酬は期待しない。また、そのねらいは社会全体の質を改善しようというところにあり、アメリカの社会では民間、個人、企業、政府各部のそれぞれでこの考え方が広まっている。

RSVPは高齢者が持っている特技や時間を活用しダイナミックにさまざまな活動の機

会を与える為に国が全面的に支援している。そして在宅高齢者や介護者を助けたり、社会の底辺にいる人達（ホームレス、難民等）にも積極的に援助していることにも驚いた。日本でも今世紀中に国民の四人に一人のボランティア活動を提言しているがRSVPの活動が参考になると思われる。

8 まとめ—アメリカから学ぶ点

アメリカはボランティア、パイオニア精神、自立自助の精神、困っている人がいたら助ける他愛の精神があらゆる所で息づいていると思つた。たとえば車椅子の学生達が作った生活自立センター、障害者達が運動を起し制定されたアメリカ障害者法や国が支援する全米退職者ボランティア協会、自分の母親の世話をしてみらう為に作ったケズウィック・アダルトデイケアセンター等である。

そして、あらゆる機会、場所が高齢者や障害者の自立に向けた支援が行政、民間ボランティアの両面から進められている。日本はどちらかと言うと保護的な政策に留まっているように思われる。  
視察旅行を通じてアメリカから学んだことを次の通り述べたい。

⑦外出し易い条件

障害者が住みやすい街は高齢者が住みやすい街でもある。メリーランド州保健衛生局の年報にも明記されていたが、障害者があらゆる建物について車椅子で出入りすることを可能にした「アメリカ障害者法」を制定したことは我が国でも学ぶべきである。日本にはエ

表16 全米退職者ボランティア協会 (RSVP) の活動内容

対象者	援助内容
在宅高齢者 (閉じこもり、独居者)	料理、通院助、書類事務、手紙の代読、代筆、ホットライン電話を使い精神的支え
麻薬使用者	若者へカウンセリング
入院患者	手紙の代筆、精神的支え
若い母	子供の育て方等を教える
障害児	ダウン症、盲人の子のケア
建築現場の若者	建築の技術を教える
ボーダー (Boarder) の赤ちゃん	両親がエイズ、麻薬中毒者で生まれた赤ちゃんに変わって病院や養育センターでケアする
難民	読み書きを教える家庭教師
地域	巡回パトロール (犯罪防止)
貧困層	スーパー等で不要な食物を集めて必要な人に配る
子沢山のホームレス母	住む家を探す
痴呆老人を持つ家族	日中介護し、介護者の自由時間を作らせ開放させる
共働き両親の学童児	放課後学童を保育する

表15 アクションの活動内容

協会	設立	資格	活動目的	活動時間
全米退職者ボランティア	1971年	60歳以上の退職者	地域ニーズに合わせて退職高齢者がボランティアとしてサービスを提供する機会を与える	パートタイム、数時間/週
FGP (The Forter Grandparent Program)	1965年	60歳以上 低所得者	子供の特別ニーズに対して高齢者がボランティアとしてサービスを提供する機会を与える	パートタイム、20時間/週 報酬なし
SCP (The Senior Companion Program)	1973年		虚弱の高齢者に対して高齢者がボランティアとしてサービスを提供する機会を与える	パートタイム、20時間/週 報酬なし
VISTA (Volunteers in Service to America)		18歳以上	貧困層に対する支援をする	常勤 1年間
SCS (The Student Community Service Program)		高校生あるいは大学生	学生に対してボランティア精神を高めたり学ぶ中で質を高める為に支援する	パートタイム、数時間/週
Drug Alliance Program		全ての年齢	地域基盤の中で麻薬等追放の為に支援をする	さまざま

エレベーターのない何十段もの階段がある駅、エレベーターはあっても電源を切っている地下鉄等により、なんと多くの閉じ込めり高齢者、寝たきり高齢者を作り出しているのだから。

横浜市の調査によると(一九九二年)半数以上の人が「安心して歩ける道路、歩道の整備」、「公共施設のエレベーターなどの設置」を希望している。「アメリカ障害者法」のような法を市として独自に制定できないであろうか。

④高齢者への見方

東京都老人総合研究所の国際比較研究では、特に日本人は「老い」に対して極めて否定的であり「歳をとれば誰もが寝たきりやボケになる」、「高齢者は皆頑固で、新しいことを始めるのは不可能だ」という固定概念(ステレオタイプ)を持っているという(図一五)。そして、そうした固定概念を持つことは高齢者差別(エイジズム)であると警告している。戸塚区に住む二十代、三十代の若い母親に「老人という言葉からどのようなイメージを感じますか(一九九三年)」と聞いたところ、これを裏づけるように、八三%の人が(複数回答)マイナスイメージを持っていることが分かった。

本人の意識はもちろん、周囲の人達に「老い」の正しい情報を提供したり、「老い」のイメージを百八十度変える為のキャンペーンを行うてはどうだろうか。

⑤活動の場の提供

高齢者を「生産性のある人」と見る。RSVPで百五歳の方が活躍していることから考

えると、日本の高齢者も魅力や能力や生産性を十分持ち合わせていると思う。国際長寿社会米國センター理事長のロバート・バトラー氏によると「高齢者を社会の中で生産的な人間と捉えられない限り、生活は危険な状態に置かれたまま重荷と見なされ、排除されるに違いない」「高齢者の生産的な能力を高め彼らの依存度を減らすこと、非生産的な人間は病気に罹りやすく経済的に依存し易くなる」と述べている。高齢者を非生産的だ、非能率的だと考えず、活躍出来る場を行政等で沢山提供していくことが、今後高齢者が生き生きと生きていける大切な点と考える。

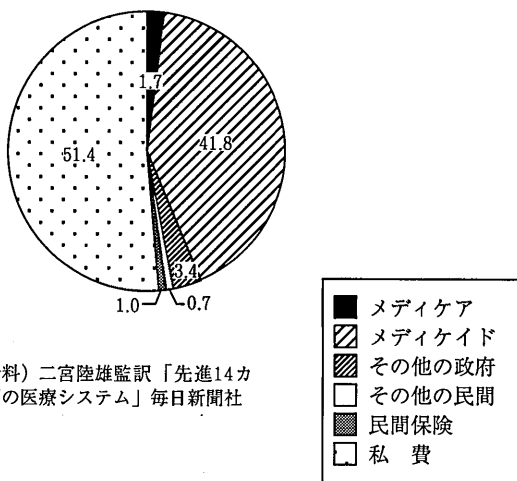
WHOは高齢者の労働能力に関するレポートを提出し、社会貢献をうたっている。柴田氏は「高齢社会には、要援護高齢者と同じ割合で優秀高齢者が存在しており、若い世代に依存せず、自助能力を持っている。ボランティア活動をしていく高齢者の余命は長くなり、免疫力も上昇していくことが明らかになっている」と述べている。

百歳すぎた「きんさん、ぎんさん」のように生産的な能力を発揮出来る機会が他の高齢者にも与えられて良いはずである。高齢者の活動の場を老人会やゲートボール、高齢者教養講座に限定すべきでないと思う。

たとえば、老若男女の交流の場や高齢者が若い世代に知恵や技術を教える場、高齢者が若者と一緒に学ぶ開放された大学の場、市が後援する就労の場、持つての特技や時間を活用してボランティア活動する場の提供は如何だろうか。

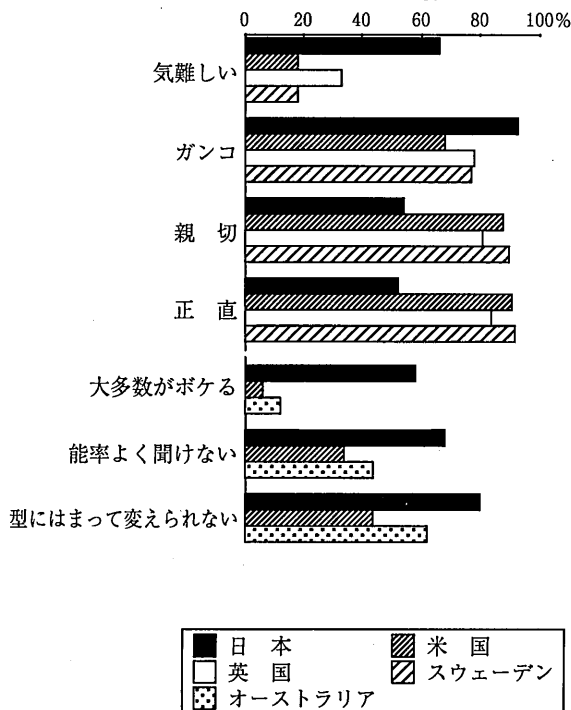
⑥在宅を支えるアダルトデイケア

図一六 アメリカ全国民の医療費支出の財源内訳  
ナーシングホーム 352億ドル



資料) 二宮陸雄監訳「先進14カ国の医療システム」毎日新聞社

図一五 老人に対する固定概念を持つ人の割合



内外の諸用研究(1964-1987年)より合成資料、日本経済新聞、1994.1.14

メリーランド州の高齢化率は横浜市の二〇一〇年に相当する一七・五％となっている。介護面を見ると女性や家族は就業者が殆どであり、また、子供は独立して別世帯で暮らしているのが頼ることは出来ず、高齢者は忍耐強く厳しい社会状況の中で八十歳近くまで地域で生き抜いている姿が伺える。その状況の中で、要援護高齢者を一割に抑え、しかもその殆どが在宅高齢者であることは何故だろうか。

その背景には次のような理由が考えられる。①老人ホーム等の費用が非常に高いため、金持ち層か、国が費用負担する貧困層しか入れない。従って、大多数を占める中間層は在宅に留まらざるをえない。(入居者は大多数八十歳以上で四〇％以上がメデイケイドー低所得者医療費扶助制度で占められている 図一6)。②できるだけ自立して暮らしたいという意志が強い。③病院の入院費は高く、長期入院を許さない。④公的制度が不十分でもさまざまなボランティア組織があり支えてくれる。⑤疾病構造は、後遺症として障害をもたらす脳卒中が日本より少ない。

さらに、デイケアの果たす役割も大きいのだと思う。一九九四年現在、全米で三千万所以上、メリーランド州では百万所(六十五歳

以上人口八千五百人対象者に対し一カ所の割合)に増えたと最近、担当者から聞いた。

アメリカのように週に数日、場合によっては長時間の利用が出来て、内容は園芸療法等のその人の能力を引き出すような専門家によるプログラムを組んではどうか。さらに行政側として定期的に質の向上と均一化を図る工夫をしてはどうだろうか。今後の横浜市の政策に参考になるのではと思う。

短期間だったが私にとっては人生や仕事について新たに違う面から考えられ、新鮮で中身の濃い旅だった。今までは、高齢者を取り巻く状況を要援護高齢者を切り口に見ていたのが、視察旅行を通じてその国の社会状況や環境、高齢者の生き方など広い視野で考えられるようになった。

高齢者の声を聞く機会は少なかったが、他国から日本を見ることにより、見えなかったことが見えたりと学ぶことが多くあった。

この視察旅行に関してアドバイスや援助を頂いた横浜市中区の小山内いづ美氏(平成三年度横浜市海外派遣研修生)、ボルチモア市での一日の視察をアレンジし同行して下さいたケイ・カネス氏、さらに快く私の視察を受け入れて下さったアメリカ各地の皆様から感謝の意を表します。

〈引用文献〉

注① 読売新聞一九九三年二月十九日付

注② 障害者自立生活問題研究会「自立生活へのチャレンジ 三頁 一九八六

注③ 河野通子「海外エイズ事情、ストップ エイズニュース 二十六頁 一九九三

注④ 福祉ニュース「地域保健(九)」百三十八頁 一九九三

注⑤ 横浜市企画財政局高齢化社会対策室「見つけてみよう六、十七頁 一九九三

注⑥ 日本経済新聞「心に巣くう老いへの差別 一九九四年一月十四日付

注⑦ ロバート・N・バトラー「健康と生産性と老化の全体的な見方

プロダクティブエイジング(三) 十一、十五頁 一九九一

注⑧ World Health Organization「Aging and working capacity WHO TR Series 835 一九九三

注⑨ 柴田博「高齢者の健康と福祉、公衆衛生研究、十三頁 一九九四

〈戸塚区保健所保健課指導係〉